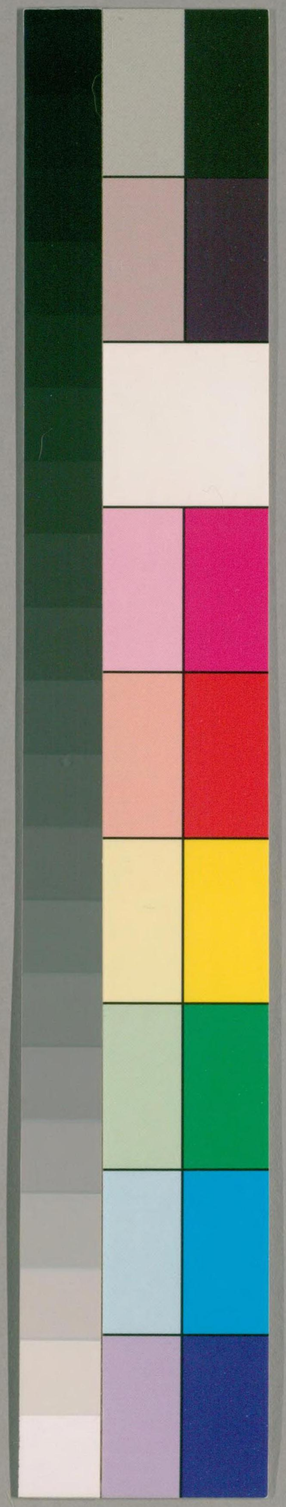
838
12
87



国立国会図書館　　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』　請求記号 838-87

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』　請求記号 838-87

ガラス使用

家忠日記増加巻之十七　諸國之乱記

慶長五年庚子

七月大

十一日伊達正宗兵ハ白石ニ在陣ニ是ハ国攻ヘシ欲白石ヲ城ハ景勝ノ臣耳糟是ハ守ル其ハ耳糟ハ今陣ニ在テ其場ニ武部土浦ハ白石ハ城ハ守ル武ア土浦ハ正宗ノ白石ハ城ニ在ル吉ハ守ル傳ハ今陣ニ在ル耳糟ニ援兵ハ請ふ耳糟ノ曰　大神君白川花ニ御働居ヲ守ハ我大神君ハ此本陣ニ馳入テ無二ニ戦死ハ遂ンヘシ欲ル是ハ相待依ニ其方ハ顧ヲ　なし白石ニ援兵ハ叶ヘシ思ヘシ其国ハ近ニ在ル事ニ有ル武ア土浦力是ニ同廿七日ニ遂ニ正宗ニ降

曾山文庫
根岸信輔氏寄贈
昭和八・八・一〇 寄贈

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

を白石の城に避け渡して伊達正宗進て福島と城に攻討へ
欲景綱とも以外て援兵に福島の城にあらず其比蒲生
後三郎ゆゑ子ゆゑ領知に減せらる宇都宮に立り依て蒲生家
人出浪人と成て多く景綱に属す国左門栗生と交渡す小田切
庄左衛門尉布施次郎左衛門尉安田勘助北川当書ゆゑ援
兵として景綱の軍士百余騎に加上て福島に打出て福島
の城より行程二里出張して謝れよす至て小川に偏て屯す
翌朝山に登て正宗の軍勢に奇来に見て国左門ハ川に
越て戦へと云栗生と交渡すハ敵多勢なれハ川に味方に有す南
を傳ひて戦へと利ありと云其評議區々数刻に及ぶ諸士
皆謂て曰栗生の謀も利ありて雖川に越さず居なるべし

戦へ事敵に恐るる似たりと各川に海を国の陣に加り既に
して正宗兵に接て国の陣に競ひ討国暫時交て戦ふと
雖利に失て敗走す北川当書布施次郎左衛門尉安田勘助
等迄合奮戦て死す正宗利に乗る自戈に採て少々追
川中にして国左門と共刀打して国の程て度に羽織に切
付る程ゆゑに栗生と交渡す川に海を横合に弛来て国の
敗兵に救ふ依て正宗の軍勢聊程像して其間に国兵に
川を福島に退正宗に至る迄に追ふ福島の城より兵に
接て国の敗軍に士に迎て救ふ依て正宗追事に出て兵
に攻て本陣に川陽へと欲柳川の城河布久野川に偏て
其間進し車丹波守ゆゑ地に登て正宗の陣営に窺ひ見

ニ宗徒ノ軍士ハ皆福島ニ馳向ヒシテ下卒ナドヲ残シ置テ
見セシニ伏兵一度ニ起テ声ヲ上ゲ鬨ヲ作リテ追掛テ陣具小荷駄
ヲ奪ヒ陣営ニ火ヲ放テ悉ク焼失セシムル於是軍用乏
シク敵難義ニ及ビシニ東丹後守須田大炊助ヲ後ロ柳川
ノ城ヨリ出テ江ニ向テ阿布久宮川ヲ渡テ政宗ノ陣営ニ向ヒ
来テ路入丹後守ノ手ニ不遠宗徒ノ軍士一人モ残シテ
置テ下卒ナド数千人残居リ郷ヨリ陣ヲ寄テ皆難儀ニ及ブ丹後守
政宗ノ陣営ニ乱入シ幕（竹ニ雀此紋）及小荷駄ヲ奪ヒ取テ陣
営ニ火ヲ放テ悉ク焼ク政宗福島ヨリ本陣ニ帰ントセシ
ニ丹後守ハ退テ兵ヲ五百陣営ニ放火セル此煙ヲ見テ
又北ノ方ヨリ難ヲ六ケ敷キ由ヲ告ル此方政宗大ニ怒テ速ニ

柳川ノ城ニ馳向テ印牧ニ城ヲ攻落サントシテ進ム柳川ノ城
ニ残居ル兵ヲ城外ニ出シテ防キ拒ミシカトモ政宗此
城ヲ力攻ニスレトモ味方ノ軍勢多ク死亡セシヲ見テ思ヒ止
リ退帰ル同ク追羽州山形ノ城ハ二本松上出羽守義光ノ
居城也　大神君ノ命ヲ奉テ義光ニ相従ヒ会津
表ニ馳向ントシテ欲テ山形ニ到テ馳集ル軍勢ハ南部
山城守戸沢九郎五郎本堂源七郎六郷兵庫頭赤尾
孫次郎岩尾右京亮滋野井刑部少輔仁賀保兵庫頭等
各山形ニ来会ル義光ノ手ノ軍列ヲ陣シ義光ノ嫡子
修理大夫ヲ大将トシテ米沢ニ相向ハシム其兵六千
五百余騎其余ノ軍勢南部山城守ハ先陣トシテ之ヲ

七千六百余騎山形ニ押寄ス其日ハ遠ク行ウテ山形近辺
ニ陣ヲ取ル于時　大神君ヨリ御書以テ告ケ給フ
急飛脚入ル治部少輔以下大坂ニ於テハ謀状ヲ遣サル
ケレハ讒説シ景勝ハ其心ヲ深ク隠キ奉ル
條此方ヘ手先ヲ扱子ニ入ル大坂ニテハ手先ニ
堅ク申付ケ此方ヨリ一所ヨリ帰ル三本行ト言状
ヲ相見返リ候ヘト仰ケル

七月廿三日　家康

出羽侍従

諸士悉ク書ヲ越シ其外色々変化又於別小山ノ陣ヨリ
或使或池也或書翰ヲ以テ上方一篇ニ蜂起セラレシ由答

ル依テ山形近辺ニ陣セラレ東路ニ会津ノ敵勢ヲ以テ押際
ル其心得ヲ有ルヘキナリ　大神君ヨリハ書以テ告ケ給フ
急飛脚入ル仍上方奉行衆一同シテ逆謀シ此
申来ル付テ関会津上洛セシメ中納言景勝
ノ家老直江相従テ計期ノ附
候ヘト仰セ候也

七月廿九日　家康

出羽侍従

山形近辺ニ屯セラル諸士　大神君会津表ニ出馬ノ
此内上方ニ逆謀ヲ起ス者有テ疑起リ乱世トナリ候
ニ於テ我領内ニモ一揆蜂起シテ便ヲ探ル事也

と義光も議せて皆已り城を海り義光等を使寄り
物は寝し続しより事は悪り

八月小

一日越後國下倉し城ハ小倉主稽正ニ於ケル越後ハ景勝
舊領ニ依て京儲ニ於越後ニ詐ハ一揆は
招集ニ下倉ニ城は閉て郭外ニ放火ニ城中出始ニ
ニ拒ニ難し堀丹後ニ連寄坂戸ハ城ニ在り此ニ
は此ニ後援ニ下倉ハ城ニ向せんと欲于時
堀ハ東臣ニ詐て曰一揆此城ニ急ニ襲ひ来らハ他は救ハ
欲て吾城治人事悔ニ甲斐ニ入ル連寄ニ敵ニ此城
は窺んかと程豫ニ小倉ニ急難は不救一揆家ニ来ら

より時ハ天下ハ指笑道ニ謂て頼ニ下倉ハ後向は
促て　二日堀丹後ニ連寄下倉ハ城援ニ居城坂戸
は後ニ下倉ハ城ニ到り城迫き上より竊ニ使者ニ合
ニ計畧は小倉ニ方は通りし事ニ小倉迄ニ及て城門
は冥ニ切て出敵陣ニ地入て忽ニ戰死て連寄小倉ニ
無恙は如て急ニ云は後ニ今津ニ戰しむ連寄力
戰して陣下ハ戰功は逾大将所手は碎て戰間信卒
粮力は難し其は降り事五百余級連寄大ニ利は降
て今津ニ及一揆し城後ニ田川小千屋ニ門退連寄進
て是は攻討ニ二百余り降ニ而後ハ軍ニ猜利
は降し使は地ニ注進す　大神君　台徳院殿南君ニ

戦功は感称すべき注書は来寄す場り
従今津上田に在に手出はるべき通合戦五百余人
に討ち取し此手柄し義せ誠に無事平に此上無双故
相し手無尾まは程西尾隠岐守下は立て得て

八月七日　家康

堀丹後守

従今津上田に在に発出はるべき則其方に相付一戦
お手前に五百余級に討ち取し此誠に無比較義難
中あれば無御所仕置に不行要に持又此表無別
条にし官下へ毎に程追ひ下に立て得て

九月九日　秀忠

堀丹後守

溝口伯耆守秀猪　約命は本に今津口押工に見家にし
て既に夜間にて欲せ候に一揆蜂起して秀猪居城
柴田に城は窺ふ秀猪城より出張して河加に大河は
海に一揆し六とも相戦ふ一揆し六利は大に破れ候追
る討秀猪多く其級は海より越後国三条に城は堀
監物来改り居城也一揆蜂起しる此城は関い溝口伯耆守
秀猪と云は少て三条に城接六にして六は夜を城徳寿
溝口の後接は少て退散す監物利は案に城中より六
は出す城徳数百人は追討す溝口三条に到りと雖一揆
し六退散すし官為方なく城徳に立家に放火して

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

死亡せしも殘兵退散して遁れ去んとせい敵是は一進討
速に弛向て是れは救人を進て二十余町弛向に畑屋し城
し故兵ハ退散し来る兵津勢備に案て是は進事
甚しく人なり矢柄お損なハ味方し故兵は討せしと是は
拒仮田揚麿なハ追来る敵に弛向て力戦し遂に仮田
戦死せし お損なハ故兵は全る山形に陣る畑屋し城にし
て討死所して三百五十余級連江使はして今津にも
しむ

九月大 一

十六日連江山城なる兼續畑屋し城に備し武威は近郷に
震て軍は分つ事二列にして長谷堂及上山し南城

に發向せ連江兼續長谷堂し城十余町は隔て須賀
淵山に屯せ其日左衛門佐は同山は尾崎に陣せ明曉
天に長谷堂し城は攻討んとお儀せ其夜城将志村
伊豆なる軍士大風右衛門佐横尾勘解由左衛門尉は新
将として夜討に到る曾士二百余人は撰て約束
し詞は宣二年にて其日左衛門佐は尾崎に陣は宣
に起て是は討其日の軍勢数なる諸々狼狽せ横尾
大風利に案て是は進討て数百級は得たり今津
勢長谷堂し城に攻来るし此宣上義志此告は竹て鉄延
越前なは援兵として長谷堂とる赴りしむ鉄延越前なる
長谷堂にて志村伊豆なるにかゝる城はなり 十八日

夫日左馬門佐一此御し御討ニ利ハ失ひ味方悉敗亡しを
命ハ殞ニ事ハ然ニ夫日七人降ニ進ニ士卒ハ指揮し
長谷書ハ城ニ攻入ニ欲城ニ石ハ殺失ハ死して野
ニ且ニハ拒く間皆時此ヲ事ニ夫ハ軍士死亡ハ先殆
百余人疵ハ蒙り去る事し左馬門佐今日ハ軍ニも又
利ハ失ニ退其後寄手ハ軍皆殺卒ハ城ニ迎
ニ荊田ニ鮭追越前ニ其虚ハ徒ニ軍士百余騎ハ
卒ニ城外ニ進ニ其後ニ殺卒ハ追拂ひ之利ニ乗ニ
連江ハ陣ハ討ニ無く之級ハ降ニ軍ハ城ニ返ニ欲
敵領ニ此ニハ幕ニ志村伊豆ニ殺卒二百余人ハ
城門ニ外ニ進ニ追来り敵ハ討し寄手ニ七人降ニ

是ニ死ニ後陣ニ敵擬議ニ敢ニ進其隙ニ越前ニ云ハ
今ニ城中ニ川入り　上山ニ城ハ義光ニ臣里見越後ニ
然ニ義光議ニ向ニ事ニ里見ハ山形ニ招依ニ出
し城ニハ嫡子里見民部大輔ハ将ニ接云草刈志
摩ニ及東山ニ江人等五百余人ハ残ニ城ハ
越後ニハ山形ニ赴ニ景勝ニ軍士穂村造酒ニ
蒲七郎粉子ニ殺ハ卒ニ物見山ハ麓ニ陣ニ上山ニ城ハ
ニ降り上方ニ至ニ正後陣ニ在ニ山形ニ通路ハ拒
く城将里見兄弟寄手ニ陣ハ寂ニ前後ニ陣其間
遠ニ殊ニ今日長遠ハ来ニ人馬疲労ニ而し陣中
譁ニ静ニ寄手ニ陣惣ニ而ニ其弊ニ

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

て上泉自然搦て奮戰ひ術なきを遂に戰死す里見民部
大輔の信士今と原七郎（于時十六歳）上泉の子は洋々より今度上山
し戰に景勝の軍士戰死せりし軍部將上泉主水正相村
造酒と逃推於上滿七郎平岩石見守松平木平助岩井
備中守は始軍士三百六十余騎新六四百八十三人して
里見民部大輔使はして是は持しの山形にもて義光大
に表称る民部大輔に感状は授與ふ　豊後國杵築し城
大神君より羽柴は中守忠興に賜り依て忠興の家人
松井佐渡守有吉雲和尤周門尉は拵を大友は舊主
となり依て其好は元のとて國民に大友に與して一揆は
義を不恒原及立石為所に要害は梅江橋に於て大友の

臣柴田小左衛門進口は一揆は促し杵築し城は裏んと家に
松井を吉岡長は守て急ぐに立は御所に柴田は討て一揆し
城徒は悉退治す是田如水中津に在て大友の隠保し企は
守て是は退治せんと欲る中津は御所は其子甲斐守長政
多勢は率て渡海に陣す依て此水の兵衛勢なり俄軍士
は促し集る中津は出勢す恒見松泉守の居城島木に進境
ありて雖是は攻す延谷の領門安義し城辺は至るに
の陣かなし其家は監物を安義し城より親率は出して
追拂んとす是田母ると多三郎尉是も戰ひ進入既に恒原
押詰り松井を吉岡に立て立石に立て一揆し
城境に出向て挑戰ふ松井を吉大に備て立て後百餘は

洋より大友の臣吉弘加三馬尉軍は多少年二間より伍
は整て攻来り黒田の兵此防ひに障易る門退事二十四町
一揆し兵利に乗ふて是を追黒田の軍勢変相寄山に退
ふるに至て敵猶慕ひ来り黒田の魁し兵久の西三馬尉
西合て戦ふ一揆し城徳に吉弘加三馬尉と一手に合競
ひ勢り久に四三馬尉勇は震ひ書ませしとも敵多勢なる
に依て遂に戦死せし黒田の臣井上九左馬門尉又西合て
苦戦し吉弘加三馬尉は強けり黒田の兵士に是を利は
洋に勇を進て戦ふ敵悉ひ已して家掃部臣吉良
伯左馬門都甲兵部大夫木部玄辰に戦死せ依て大友の軍
勢石垣原は退散せ南地に化險難し地にして容易に

破却し難きに依て一日一夜に是を守りて陣せて防ぐ如水
斗黒は和義は結ひ遂に大友は揃ふる陶り黒田如水是
路に起き安藤し城二十余町は隔て順路は過ぎ安藤し城
より陣を平は如水を黒田如水の行列は整へと欲黒田謀
て不戦して退く敵其利に乗ふて慕ひ来り黒田
兵は山陰に伏兵敵呼門出事二里にして伏兵一同に
起て関は如水を攻討敵急に如き是は退事二里
安藤し城門に至て敵は城に追入九夫より如水富木と
城に兵は如水を急に関て攻討既朝城は移んとせるに
に城兵矢石は飛して黒田は拒し宵黒田の兵麻は亂
に死亡し者多し依て如水晋兵は好て人馬は体も

廿日至田文求安芸之城ニ到て福島正則ハ此内ハ嶺ニて 遠
江守右衛門尉 其弟右衛門尉ヲ遣保子役して遁て安芸と
城ハ明渡して 三家老遁て居て大坂し城ハ明渡して
備後東方ニ赴ておし者ニ大坂し軍勢関ヶ原の戦ニ
利ハ失て後ハ去りし者ハ皆て九月十六日未明ニ筑
前二子隆景ハ卒て入道し三原御幸町辺ニ陣して筑
後守ノ許ニ使ハ遣し関ヶ原之一戦ニ子息秀秋ハ
変て 大神君の麾下ニ属し軍忠ハ励まし此ハ芸
肥後守東志ハ変ずる旅ハ我是下ハ相待て大坂し城ニ
擒へ来て秀頼ニ忠義ハ尽さんと欲しけハ之を聞て 木下
肥後守ハ太閤秀吉の政所の兄なるニ依て政所ハ
守護して大坂ニ居て北門より肥後守ハ大坂籠城し事
吾ら某甲ハ承知なし迄て約ハ定て面さし此ハ返答して太子秀頼
し本丸ハ果の形勢みえてハ非し月之至らて使ハ先てより
及大坂の地形天険し攻ノ陣る毛利ら方ニ使ハ立ねて
大坂籠城ニ於ハ我ら共に城ハ守て東の方ハ是非するハ之遣
きて毛利ら之ハ籠城し評議一決せまて寺ら返答を与えて居り
立花ハ秘する事ニ守て評議し事成るとて九月吉
大坂ハ立ち退て領國ニ赴く同廿二日筑前國若松ニ着岸し
て夫より陸地ハ経て同廿三日居城筑後國柳川之城ニ
入り縦ての評議ニ及び一旦遁ものニ與まて雖大坂
悉く肥前ニ出國して 大神君の麾下ニ属すへしと

於勵さんと欲て使ひ被て于時九月十八日開ケ原一戰に後
なり信し信濃ゟ彷茂伏見ゟ爲て是ハ謝さて
大神君鴻ゟ力笑なりたゞ此感ゑて信濃ゟ免許到本
領ハ全く賜て立藝左近拘監ゟ逆徒に與せりハ思せもひ
彼ハ攻討面きしらハ　約命ハ其所ゟ信濃ゟ大ゟ喜て和
國ゟ赴き父加笑なりと云ゟ師ハ帥て立藝ゟ居城柳川ハ攻
討立藝ゟ兵士小野和泉ゟ坂木原曰代に至て出張ゟ拒き戰
立藝ゟ堀兵立藝三士更戰死て鴻ゟ大軍進て城ハ攻
立藝拒ゟ力竭き加茂法正建田ハ死ハして和睦調ひ城
ハ避渡し其後江戸に至て敬ハ先ハ家人となり
廿二日最上出羽ゟ義光兼て約せりゟ信て伊達正宗ゟ

接兵ハ請ふ正宗是ゟ應ゟ伊達ゟ攻ゟ遠方ゟ所に馬尉
ハ其持てして軍士百五十騎与率一千余人ハして山形
に赴しむ亜江山城ゟ兼續ゟ陣ゟ兵御來て石田三成書
簡ハ以告て云此廿三日東兵岐阜し城ハ破て氣ゟ所に
味方し軍士悉く死亡せしこと亜江此方ハ投見ゟ色ハ
変し力ハ失ふ又山形にも御力進て來て
大神君より此書義光ゟ場
急度申入ハ去廿三日午し刻岐阜し城ハ兵前中納言
光才一人もふ渡接切申ハ此ハ進ハ兵書状ゟ持
進しハ堀正宗て兵ハ我ハ父子も出陣申ハ習
萬事其元しハ行無油斷ハ仰付て給ハ秀田宗憲

下ハ月不能具ハ云々ニ候ヘ

八月廿七日　家康

出羽侍従ヘ

急度ヲ入候ヘ事ニ候ヘ信州ニ候ヘ進ハ為波草法語
治部少輔為洋其外ニ人数上戸川為ハ雑出ハ此ニ付
ろくれ川ハ進入一人も不洩討れハ其上大ニ人数出
佐和山ハ無法ハ月二三日中ニ落城ニ候ヘ万事ハ於時
宜ハ云々ニ人安ハ云々ニ候ヘ

八月廿八日　家康

出羽侍従ヘ

廿五日実上出羽ニ義光師ハ師ニ長谷市ニ出ル

敵ニ五十余丁ハ隔テ陣ヲ移ス濃州ニ御力
来ニ今月十五日関ヶ原ニ一戦ニ石田三成ハ始関西ニ逆
徒ニ悪敵ニ亡ヲ取ル也ハ　大神君ニ此事ハ義光ニ為ニ
是ハ告知ル也玉ハ義光大ニ恐悦ヲ上方ニ逆徒ニ敵
亡ヲ取ル也ニ云々ニ敵陣ニ其告ヲ取ル也ハ
敵必陣ハ退散ヲ取ル其弊ニ云々ニ候ヘ追討ヲ取ル
ハ陣中ニ相願ル位ニ諸卒皆敵ニ陣ヲ取ル戸上山ニ方ハ人ニ
我相事ニ敵陣官ハ自焼ル退く煙顕れ見ル義光
士卒ハ指揮ル事ニ候ヘ追ル也ハ海口左馬助松原常陸殿ニ
日敵ニ於テ踏留テ力戦ヲ取ル雖一陣破れテ残黨全ク
ナルハ海口松原ニ遂ニ敵ハ義光ニ候ヘ也井境ニ追討ヲ

一千余人は討て亜江武功し勇士ような位を地利ようにて
陣は都督追来り敵は相支て奮戦小義光の兵とも
擬議の不進亜江利よ無て急ぎ攻討し宮義光の兵
小し二十余町は退き陣を亜江先は遠く不進其初は
戦場し迫り陣は張て初は明を景勝軍士ニ来放材勝
は部将らしを一揆は敵し越後國下田村し此石の猶然
の羽柴美作守親良本姓坂之は敵を下田村し城は関を
攻討親良大に猜ず百余は得たり逆徒小遂に利
は失て城は退散を親良刑書は尾して此由は
大神君　台徳院殿為君に注進を
大神君其軍功は座にもらの親良に仕事は所り

舎津境同江景勝出人数併一揆し家刑親付悉に
于果し此注進状別を大津余有披見を以て能は
度元し義清別皆別為口し詰城不移時刻貴崩
逆して族加誅伐は大切し義口領に遂に来在
其旨は粒西尾隠岐守事は正に注て

九月廿八日　家康

羽柴美作守

廿八日黒田如水再為来に敵を城は関を攻討事十余日
如水智謀は尽し勇は震と雖恒見和尚に兄如水門
の嫡子恒見九三郎尉武功し家士より城は堅固にもり拒く
宮城衛らして親良の恒見熊谷大炬し城を殺害を

建田甲斐与長政恒見ヶ敵人の約捜て恒見ヶ執事口良
新右衛門尉は其後國に下して安藝し城に投入れ恒見
和泉守の士と害は新右衛門尉に説しむ　伊東民部大夫大坂
に在る　大神君今津表は進ぬ時此伊東熱浦在政
建田甲斐与長政は民部大輔　大神君し幕下に属
し忠儀は居在無きと方は達せ　大神君其力は法感ある
は書は民部大輔に帰り民部大輔東國出勢は促せしものなる
俄主と病に侵され大坂に如何して卒去せ其子伊東修理大夫
祐慶（于時十二歳）幼年なりし雖東國に於て
兵は促逆徒高橋右近大夫に居城宮崎し城は攻取人を
寇ふ　晦日伊東修理大夫ヶ軍勢宮崎し城に移留せ

修理大夫ヶ軍ありし後に家臣士卒等は指揮せりし日
東國に於て為建田の水に擒使は請ふ説ヶ宮川半右衛門尉
は指揮せ修理大夫ヶ臣稲津掃部頭は部将として百余
騎は軍勢は以て宮崎し城は囲む

十月大

一日伊東ヶ軍勢宮崎し城は攻討ある大に利は得る城将
権藤平右衛門尉父子三人は討取権藤平右衛門尉は荒木
粧右衛門尉は討嫡子は元切四郎左衛門尉は討
嘆ハ四本與左衛門尉は討つ其式百余人とて得る
と伊東ヶ信卒戦死せり大五十余家等其後伊東ヶ軍
勢穆佐倉園本狼綾合に進て栗瀬に陣にして

戦を敵百余人は討れ又志田山本拓口不ことに戦を勝利
は得たり翌年に五月敵遂に降を和睦を信じ不捕
し領地宮崎四万石は言稱に至しも　巫江山城を兼濱
十月朔り黎明に及ぶ陣は深を退く形勢に注て源
此に言地に陣卒は伏せ地利に依て陣は多つ事十八列
とし是を巫江本陣は川退く宮上義光の軍勢此に注は
あるとも伍は執て是は追事せ是を人なり巫江思ふ勇に
敵は川付多方に山より伏兵は出来て目に下に見下し
大地は飛し是矢は敵事面に此し義光の兵猛獣し群
散せ矢に中て死亡せりもの数百人に及義光猛を降に
逢て拵揮せ士卒に持は討せしと矢者に死寒を走付

故右衛門尉は初として義光の猛兵矢に中て死亡せる者
多し此に九州に兵堀喜叶に来と云共又群國は廻り
武夫修行は頃年義光に属せ其武勇は称名の俗に
呼て今義猛と云ふ此時に来義光に落し袖はひかへて大将
に陣敵と進し依て士卒多く命は殞せ陣は退き可
玉田は諫ひ義光に勝て泄い日比少しこも似せ軍に法は
不知其後しより味方利は失ふに軍に将後陣に川退
かは吾其孫勇力衰へ必大に敗亡せ即し　継令士卒に
死亡せりとも山上に陣上に敵は追崩さすに又即ち
せしと義光猛も勇に進ひ此時に来西国は失て我剛猛
に実否は是にあらしと云ふ手は嬢に死上り敵は勇

表家堅固に言ひ仰付ハ事行要ニ於て朝夷に
ハ云ふ

十月朔日　秀忠

羽柴兵作ハ

二日谷地に行より義光の陣に告て曰景勝の軍士下次
右衛門尉と云者西江の陣し退散ハ不知舊營に楠新
を迎ひ邑里に放火し武勇ハ無底し此ハ告り義光
等を殺ふ云ハ不得ニ云ハ討んと欲彼下次右衛門尉ハ
兼て等豪士なり殊に田川ハ那ハ下の舊里なり
由彼ハ味方に属せしめ主なる庄内退治し時葉
内者と先ハ能謀なり而しと志村伊豆守ハ報て此ハ

議て志村多賀ハ年を谷地に行る後局を下り楠新に
舊營ハ図を賜ふ故村田ハ所ハ所ハ知りて寄る城中
使ハ書し謂て曰未知や開西し遥徒に決別関原に
戦て悉敗亡て西江此告ハ等を此り云ハ引て今陣
に所り報り事ハ汝獨に告て敵国に弃ふ事を
恨なりとや援云云ハ此日營に至る義ハ之り命ハ須ら
何れ益かなりん降て義光に属し軍忠ハ原さんに於て
ハ云て賞最大ひ来面しと云て云ハ云ハ云ハ治右衛門尉親
族衆人等ハ集て詳義をもし云ハ義光に降人事各宜
なり而きとりハ諫ひ依し翌朝城ハ避て伊豆守に遊
伊豆守悦て城を下次右衛門尉ハ初信士戸井本右衛門尉

原八左衛門尉下義作与并戸牛も物ホ城ニ籠所ニ軍勢
ハ携ニ志村山形ニ帰ル下次右衛門尉及信士ホ山形ニ
到リ義光彼ニ出面シテ曰近日庄内ニ在ル向ニ在
テ出来ルトモ先降ニ加ルト軍火ハ御ニ於ハ田川郡ハ
全ク死力ニ出ル也ハ約ニ義光ニ出ル也ハ

十一月大

十三日黒田ハ本ニ列ニ三面所ハ信ニ中ニ渡ル間ニ賢人
馬ハ休ム又国國小倉ニ進テ在ル向ニ毛利ニ在ル時ハ城ハ
攻ム毛利力ニ在ル城ハ遮ケ渡ル
主恒見和家ニ渡列大恒ニ城ニ入テ恒見和家ニ出ル
ニ在ル家人口良新右衛門尉城ニ入テ告知ルニ依テ

遂ニ出来ル城黒田ハ城ニ寄ル渡ル
善右衛門尉ニ報テ在ル村上掃部ハ新行ニ在ル藝州
ニ在ル吾ニ留ル利ハ左馬助ニ加明ニ在ル城ニ
使ハ来ル遮ケ渡ル由ニ告ハ説ハ加明ニ牙ハ
内記家信佃次郎三衛尉中留猪右衛門尉安達ニ右衛門尉
ニ在ル庭ニ依テ輝元ニ軍勢直ニ城ハ攻ム人ニ欲テ
三津浦ニ陣ル其ハ佃次郎三衛尉ニ籠ニ善右衛門尉
ニ三津浦ハ陣ハ義ニ宍戸ニ合ル戦テ軍ニ利ハ降ル遠ニ
ニ根村上ニ討ル佃次郎三衛尉子ハ捧テ苦戦シ庭
ハ無敵ニ在ル後ニ退ル事ニ出国ニ信人平国三衛尉
ニ去ル毛利家ニ加ル志ハ通テ毛利ニ在ル国中

三ノ川入江原に福島者ニ掻分ケ加藤内記兵ハ三津浦表を
打破ル然して山ニ陣して江原ハ福島と押合ひ出しく
前田を加藤ヵ軍士共ハ追払ひ小敵勢として久米と共
士卒より川退加藤ヵ軍士共ハ追ふけ数ヶ所討敵能拒て
加藤ヵ兵士黒田九郎三衛尉戦死して加藤内記三津浦村し
敵地を併て江原と福島ハ是ヘ欲手時延德亦使別閑
ヶ原より来て旗を立てし直はける敵勢と澳比解て
義別より所々　長谷我部宮内少輔関ヶ原に戦場は過ぎ
去りし土佐之国を治る勢ハ諸へ依て其跡は宥し丸不
領ハ残され井伊直政其はを手る所従條木平主衛尉は
して国中は割ける一二貝足にて城従者ぞ接

従ひし山林に迄を不侵長宗我部ヶ所へ是ノ盛を渡て属す
然一高貝足は退治を　肥後之庫氏義弘大将として
大神君景勝は退治として東国より進発し時義弘
は味方に属し忠義は尽さん事を遠く申遣る
方に与ふ詳伝状を　大神君東国は発向し據石田三成
途に入や企て尋ね来て是は集する伏見に城は入んと欲
時伏見之城将鳥居彦右衛門松平主殿
内藤弥次右衛門村田長松平五左衛門尉近臣等ヶ方へ
義弘籠る使は遣し候そ曰我は兼て
大神君は麾下に属て軍功を尽さん事を誓約を
遂日大坂よ遠従を以て伏見之城を開し

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87　　ガラス使用

城兵板本次郎助兵衛を搦手し所把は焼崩さんと
欲清正の兵士逆川忠次郎出合て板本次郎助と戦は
合せる日下部與助山田太郎右衛門尉因姓伊大衛門尉
武藤は合武左刀打し甚戦る城兵は追拂ふ踏る清列関ヶ
原より小西の姪平逃げ来りしは清正是を宇土し城に進入
まと逆徒し故元は告しむ所に城中し兵勇力是を遂に
和は兵を城は清正に遁げ隙を清正城兵は勇切は感る
彼者は招を多く清正の家人とす　薩列し軍勢把度
國佐々し城は関むるに依て加藤清正此人庫として是田
如次後援として薩列し境津名木水俣に兵は設を于時
薩列し軍士ニ濃列関ヶ原ニ至る逆徒ニ悉敗亡し告は
守て佐々し関は解て逃げ去る

家忠日記追加巻之十七終

家忠日記追加巻之十八　自慶長六年至同十年

慶長六年辛丑

正月大

一日　大神君旧冬ヨリ御不例ニ依テ諸士参賀セシメテ

五日　大神君御不例快然ニ依テ列侯ニ下大坂城ニ来テ新正ヲ祝セラル　大神君将軍家ト共ニ賀ヲ受玉フ

十八日　大神君池田三左衛門尉輝政ニ茶入（播磨肩衝）賜ル　此月松平和泉守家乗ニ上州那波ヲ以テ換テ濃州岩村ノ城今ノ邑二万石ヲ賜リ野州宇都宮ノ城並ニ邑十万石ヲ奥平大膳大夫家昌ニ賜リ

二月小

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

三日　台徳院殿池田輝政ゟ宅ゟ度御ゟ出ゟ候
大神君ゟ賜ゟ此茶入ゟ以此茶今ゟ得ゟ候ゟ賜ゟ
台徳院殿ゟ此太刀白銀ゟ輝政ゟ賜ゟ　此月
大神君領知ゟ被持ゟ賜ゟ上野國箕輪ゟ城十二萬石ゟ賜ゟ
江州佐和山ゟ城食邑十八萬石ゟ井伊兵部少輔出政
上総國大多喜ゟ城十萬石ゟ賜ゟ勢州桑名ゟ城食邑十
萬石ゟ本多中務大輔忠勝ゟ舊領大多喜五萬石
ゟ本多門記忠朝忠勝次男後改出雲守と上州鳴渡ゟ城二萬石ゟ賜ゟ
淡州大垣ゟ城食邑五萬石ゟ石川長門守康通上州
白井ゟ城二萬石ゟ賜ゟ三州岡崎ゟ城食邑五萬石ゟ本多
出雲守康重武州河越一萬石ゟ賜ゟ上州厩橋ゟ城食

邑三萬三千石ゟ酒井河門守重忠上州布川五千石ゟ賜ゟ
左州土浦ゟ城食邑三万五千石ゟ松平勘四郎信一後信豊守と改
武州八幡山一萬石ゟ賜ゟ三州吉田ゟ城食邑三萬石松平
與次郎永清後改云南部上州宮崎二萬石ゟ賜ゟ淡州加納ゟ城
奥平美作守信昌下総小南三千石ゟ賜ゟ遠州掛川ゟ城食邑
三万石松平三郎四郎定勝後改隠岐守上州久留里ゟ城三萬石ゟ
賜ゟ遠州横須賀ゟ城松平出羽守忠政大須賀武州寄西
二萬石ゟ賜ゟ常州金間ゟ城食邑三万石松平周防守康重三州
吉良本多縫殿助康俊武州松山二萬石ゟ賜ゟ遠州濱松ゟ城
食邑五万石松平左馬助忠頼上総國二萬石ゟ賜ゟ豫州宮津
ゟ城食邑二萬石大久保治右衛門尉忠佐豆州蓮山ゟ城

將る後列府中に城内有三左衛門尉武列川越に城五千石
將る上列那波食邑一萬石河井雅楽頭忠世中那五千石
將る上總下總兩國に内食邑一萬五千石青山左陰殿忠城
下總國小義川一萬石將る參列深溝に城食邑一萬石松平
又八郎忠利後主殿改と改イ助る後列興國ちに城食邑一萬石を郢
三郎三衛尉康景尾列小川に城食邑一萬石水地三左衛門尉
分長後改て備後守尾列星田に城三萬三千石將る勢列神戸に城
食邑五萬石一柳監物並盛祀本國加賀四萬石舊領
合て十二萬石ち深志摩守廣高伊与一萬七千石將る寺後國
日田玖珠速見三郡食邑一萬七千石久留島右衛門佐康親
江州に於て加賀二千石舊領合て七千石永井右近土支

並獨上總國猪浦に於て二千石舊領合て五千石植村
左佐守泰光に賜る

三月大

三日武列河越三千石に將る後列田中に城庄地一萬石
河井備後守忠利に賜る　廿三日　大神君大坂に城より
伏見に城に移るとあふ大城に城留守居にして三郡
三郎三衛尉康景に西に丸に獨居す明年三宅左右衛門尉康貞に代て三郡三衛尉康宗関東にあり
廿四日　台德院殿大坂城より伏見に渡御あり　廿七日
台德院殿は入洛此日秀粒桂大納言に任せて元桂中納言　廿八日
台德院殿桂大納言に任ある元桂中納言此日下邸に忠吉御渡に任
し後四位下に叙せて元桂五位下　廿九日　台德院殿參内

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

四月小

十日　台徳院殿伏見江出玉ふて東國ニ赴玉ふ　十五日佐竹
義宣伏見ニ到ル

五月小

十一日羽柴利光元服（本此前田利光と改ひ午時十三歳）侍從ニ任し
大神君より松平ニ姓ハ賜て松平氣前守と号　廿日ニ願
印ハ高野山ニ附し　且可宗門ニ法式五箇條ハ定玉ふ

高野山寺領寄附状

一　七千五百石但紀州伊都那賀与郡ニ内庇法中
一　二千石内千石ハ碩学ニ庇所ニ来年ニ領
都合九千五百石

右領地永代ニ寄附就所尚ニ通全ニ領我上ハ亦
不抽天長地久ニ敷圓満一天泰平四海静謐ニ精
新者也

五月廿一日　家康

金剛峯寺庇法中

高野山法度條々

一　庇法行人法云事任往古旋ニ為各別事
一　庇法方領内ニ人足竹木ニ為一職進退但山上山下
ニ法仰藍造宮ニ時二萬千石ハ人足ニ不分出ニて
召仕事付於人足ニ先利者法五方出奉行人
行人方人足ニ先利者法庇法知ニ庇法方人足ニ

先利を以行人に知る

一 青蓮寺之後ハ信公後之寺修造し材木并薪ニ此中
ゆゑ来物山之中雖何之山林に伐之事

一 青蓮寺二千石之門千石ハ住寺檢校諸殿之料千石
者流徒中碩学流八人に配分右八人之内闕如し時
者学侶之中器量とし学者任獨次彼跡ハ令舞
進事付無量光院加領ハ為當信一代也

一 諸伽藍破壊し時ハ從流行人方ハ中送りて修造
し旅出し尋勘者對流徒に遂し諸伽藍無簡別
以千石し修理免て致造営事

右條々堅守此旨紹隆佛法永代不忘失て抽天下泰
平之無行者也

慶長六年　家康

五月廿一日

金剛峯寺流徒中

廿五日西口孫九郎忠負卒ニ二十歳嗣子無子信之事
約命身無穢当正負孫九郎ニ家督ハ續

六月大

十四日松平門猪正家廣卒ニ二十五歳　廿五日彦坂小刑部法勘
ニ事ハ歳り　廿八日松平筑前守利光中納言利長ニ家
督ハ續利光実ハ利家四男利長ニ弟　此月　大神君諸國し主ニ命ニ
猪所ニ湯城ハ築しめ玉ふ事行人八人天下ハ善く治玉ふ後城ハ築しめ玉ふ此猪なり

ふりの歩り戸田左門一西蒙　台命大洋し城より猶不
し城に移り（一西猶所し城に在事三年ましを死也）

七月小

一日中納言景勝居城會洋は稱て落る赴く　日四日
景勝落る到り從去年　三河守秀康る固て敵ゑ城
請ふ固云　大神君にて飛は完てられ今日入洛せる也

八月小

廿四日景勝領せる所會洋し地百萬石は減らん米洋し
地三十萬石は領ゑ最上義光に命る景勝の領門酒田
し城は請ひしむ此城に景勝の臣河村兵義志田修理兄
木橋に敵て城は不從依し出羽守の三男清水大義志浦及
橋岡甲斐守は部將とる本城出羽守鮭延越前守志村
伊豆守野澤宮門小浦白石備前守里見越後守加藤
源左衛門尉ホ一萬五千余陽山形は稱て月山し藏は越て
酒田し城に向ふ城兵志田河村此告は守て酒田城より兵は
出して最上川は前る南て陣せて清兵の軍勢川岸に陣て
請卒は川は渡んを相進むと雖折節河水増て渡事は不
得雖多く十余町川下より獵船十五六艘に乘去年義光
の味方に属せる下次大衛門尉河は渡て向ふ岸に上る志田
河村親卒は指揮して大炮は放て影を拒て下次衛門尉
の先隊し兵鉄炮に中て死傷し老多し依て下の軍士寺
狩藤の進事は不得下の親族戸井本右衛門先輝に進て

三男物兵衛出平以為先手時湯原ノ大森左衛門河内ヲ渡テ下
次左衛門尉ハ楯ヲ志村河村敵此大野方河内ヲ渡テ襲ヒ来
然レ共伍以乱レ不能者ニテ下次左衛門尉利ニ乗テ湯田ニ
城ヨリ出テ以進討其敵百級以得ヨリ敵将大森打下ニ続テ
湯田ノ城ニ籠テ城ヲ囲テ奮戦撃戸沢九郎五郎政盛（後改大安）
兄ト長戸沢右衛門城下ノ民屋ヲ放火シ湯水ヲ因テ城ヲ
囲テ攻テ城将志田河村力以尽テ拒キ戦フ此ヨリ先ニ
寄手ハ物頭長加茂源左衛門尉矢ニ中テ死ス其日兵将ヲ
先登ニ進テ大手ノ橋ヲ渡テ城門ニ攻入志田河村拒ニ亡ヒテ
雖寄手ノ猛勢襲ヒ落シ首級等以テ降ル処ニ和議
請テ大森左衛門ニ降ル許テ志田河村ニ一命ヲ助ケ湯田ノ

城請取ル志村伊豆守ニ以テ是ヲ守ラシメ大森左衛門山形ニ
帰ル　廿五日景勝ノ旧領会津六十万石以蒲生藤三郎
秀行（ニ後改飛騨守）ニ賜フ

九月大

八日松平外記伊昌卒（四十二歳）　晦日　台徳院殿ノ姫君（于時三歳）
御輿加州ニ入テ松平筑前守利光ニ嫁シ玉フ大久保相模守
忠隣并山岸陸奥守忠成之以送リ奉ル上使安藤対馬守重信
伊丹喜之助康勝（後改播磨守）稲葉土佐守牧野久志摩左馬介等
供奉ス越前国今庄ニ於テ大久保相模守ハ家康世以渡シ奉リ
當馬守其以請取丹山方陸奥守真桶以渡ス長九郎左衛門尉
其以請取此姫君三男五女以誕生ス長男筑前守光高ト改号

次政ゟ利次三男石丸除ゟ利治長女女右近大夫氏政ニ嫁
し三女松平安藝守光晟ニ嫁し四女八條知親親王ニ嫁し
二女五女早世なり　台徳院殿江戸ニ во
三千石以飯山社領ニ寄附以其国ニ開発所せしめ
惣寄附給し地及公事ゟ人以流偏し四辺ニ定めしめ
坂倉四郎右衛門尉勝重ゟ伊賀守ニ任し　加茂喜左衛門以して令ゟ
京職ありし

十月大

十二日　大神君伏見ノ城ゟ遂東国ニ赴せ玉ふ　来津
清右衛門給恒平右衛門園田竹右衛門尉以伏見ノ城ゟ
ヲ預し置り　園田ハ九ヨ賜ぬ　十三日　大神君佐和山ニ着御

十四日大垣ニ着御　十五日岐阜ニ着御　十六日
大神君濃州加納ニ着御　城地以巡見あり　十八日
台徳院殿台田十七年文重利ハ召て御家来ニ加ヘ玉ふ上意ニ
中辛利歳十八　遠州濱松ノ城中ニ寄ゟ奉作主従之論
ニ及ヒ聖朝大年ノ所ニ住ヒ遂ニ主従ニ以移し　家松
出奔ゟ井伊直政ニ許ニ仕ヘ執ニ指して同十八年小田原合戦
ノ時直政ニ属して相州ニ赴ト小田原ノ城麾下曲輪松草
ノ時戦功あり　再以来ニ其秋又直政ニ歸以去て蒲生
飛騨守氏郷ニ属し奥州九ノ戸ゟ逆乱ノ時軍功あり
諸士以称ゟ度ニ軍功　台徳ニ遂し召て再出して人ニ属
きり云也

十一月大

五日　大神君江戸ゟ城ニ入玉ふ于時島山義真（後改長門ゟ）
大神君ニ謁ス　九日　大神君忍河越ニ移し玉ふ
廿八日　大神君江城ニ還御　此年青山左陸及忠成ハ江戸
町奉行ニなさしめ玉ひ実奈詰奉行ハ兼ねる本多佐渡ゟ正信
門前後御見元正成ホと同く是ハ務ひ門前御記正重ハ兼行ニ
となるより（与井忠三郎 利勝元祖）青山善四郎重長ハ兼行ニ既となり（父善三郎 正長ゟ元祖）
大久保荒之助忠恵煙卒鉄炮頭となり　此年豆州下田
五千石ハ三州田原ゟ城合色一萬石戸田出佐ゟ為ハ頭ニ
此年御勝左京ゟ大久保長信四位下ニ叙し紀伊ゟ住て松平
三郎四郎定勝信五位下ニ叙し侍従ゟ住て本多

善四郎康紀信五位下ニ叙し本多ゟ住て松平興次郎
家清信五位下ニ叙し玄蕃頭ニ叙して松平勘四郎信正
信五位下ニ叙し伊豆ゟ住て小笠原次郎重仲信五位下
ニ叙し前馬ゟ住て松平善四郎康安信五位下ニ叙
し元見ゟ住て山口本左衛門尉重政信五位下ニ叙し
但馬ゟ住て　此年重政ニ武州ニ於合色五千石賜
去年出陣方ニ属小川左馬助今ニ至て本願卿も宛行ハ
是ハ何時も弱ハ見接続きニ所し此詰人詰ゟし也
此年大久保五郎左衛門尉忠俊卒去（七十八歳）
慶長七年壬寅正月小
一日江戸ゟ城ニ出ゟ　台徳院殿　大神君ニ謁玉ひ新来

所望し玉ふ館を各に以且此旨を以て辞せし
大神君従一位に叙し玉ふ 元正二位 十九日 大神君江戸の
城を出玉ひ速やかに伊勢路を以て京師に赴かせ玉ふ

二月小

一日井伊兵部少輔直政卒す 四十二歳 十四日
大神君伏見の城に入玉ふ

三月大

七日紀伊大納言頼宣卿誕生 幼名長福丸初め常陸介 母は正木氏養珠院と号す 十三日
大神君伏見の城より大坂に渡御 十四日 大神君大坂
の城に入御まして秀頼卿に御対面ましまし 十五日
大神君大坂より伏見の城に還御 去年より大内造営
成るに一揆蜂起せしむるに依て 南部信濃守利直去年以
兵を発し退治せんと欲し玉ふに寒風厳しく破られ浮て進退ならす
進退自由ならすして 信濃守利直暫く江戸に帰り居城に伺ふ由
奏聞有るに依て兵を発し一揆を鎮し 忠継以後村上時白石にて一揆等を
與し力以合戦ありと雖 利直を遮て一揆以退治せしむ 此矢
年人合戦 大神君の御命により 台徳院殿より去年
侍従五位下に叙し 書院番を以て召され奉行に
補せる

四月小

六日内藤四郎左衛門尉正成 摂津の国に赴き帰り川上景
世の名を以て家人よりの依て 台徳院殿に次第返ぬる

久志本左京亮以栖間しくわしく療治に加わりし雖
主ニ病ふかく依て此月十三日薨す年七十六歳 十六日薩摩
大隅守護之印以家臣伊集院伯（修理大夫義久入道）赦す 廿八日
大神君伏見より以入洛

五月小

一日大神君参内 二日院参（女院御所）于時猿楽ありて
三日相國寺ニ詣す 四日伏見之城に還御 八日佐竹
右京大夫義宣か領地常陸州八十万石以減して秋田城
二十万五千石以賜ふ（初秋田五万石以賜ふ後十五万石以加賜ふ） 松平周防守康重
松平五左衛門尉一生 由良信濃守 菅沼与五郎 藤田
能登守等ニ命す 命ぜらる常州水戸之城以てくしくしむ本多佐渡守

正信大久保相模守忠隣 約 命以奉て常州に赴き國中
之制法以定む其事畢て後正信忠隣江戸に帰り術
を押へしむ 松平伊豆守信一 命以奉て常州江戸崎
之城主以新ニ其子信吉（後改安房守）同國府中之城以賜ふ

六月小

一日伏見之城ニ於て 十一日本多上野介正純大久保石見守ニ
命して都ノ東大寺之宝蔵以開蘭奢待以切せしむ
勅使勧修寺右大弁光豊広橋右中弁総光 勅以奉て宝
蔵以封す 廿八日肥前国より飛脚江戸に到来して異
国之漂船ニ遭之所ニ於て大元二千二百余人

七月大

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

本多正信大久保忠隣為列兵戸より江戸ニ帰テ後松平
因幡守康元ハ二古城金山間ゟ事丹波守其子下総
馬場和泉守其子新介大庭主水宛行ナ将シテ佐竹
宰人ハ根本ゟテ挨ハ企テ水戸ノ城ハ親ル于時大庭主税
ヲ始人諸ヲ城中ニ忍ビ入テセ松平五左衛門尉ヲ当所ニ於
テ生ハ生捕テ法ヲせテ乙ヲみヲ彼ガ懐中ヨリ一揆ハ企テ
四人ハ京済ヨリ列ヲ以ヲ帰シテ因幡守康元ヲ城中ニ諸
直也人ホ披ハ金間ノ城ニ居ル告シ康元モ又ヲ池走リ
兵戸ノ城ニ入ル其秋去ニ刻ニ及テ一揆多勢ハ率テ
競ヒ来テ三ノ丸ハ攻ヒ城モ矢ハ放シ火炮ハ放チ鯨声揚
シ此ヲ一揆ノ織徒利ハ失テ退ク翌日城将ホ相評テ事

丹波守ハ帰リシ　其外一揆ノ張本人ホ悉ク是ハ生捕松平
丹波守ハ太田ノ城ニ在テ馬場和泉守ハ生捕テ兵戸ノ
城ニ在テ刈理由ハ江戸ニ注進セテ検使トシテ安藤
五左衛門尉大久保忠右衛門尉水戸ニ来テ其事ハ法
モ後ノ面使一揆ノ張本人五人ハ誅シテ江戸ニ帰リ其後
御意ニ示サレテ為又水戸ニ川近テ彼地ニ在テ遂ニ逝去セ
ラレテ又有馬法印（俗名中務少輔則頼）卒去セテ嫡子玄蕃頭豊氏丹波
国福智山ノ城ニ居テ別ニ采地六万石ハ領セテ又法印ノ
遺跡摂州有馬郡三田ノ城今邑ニ二万石ハ豊氏ニ加増
因茲旧領合テ八万石ハ領セ　大神君松平源次郎ノ
娘ハ御息女トシテ豊氏ニ嫁セシメ玉ヒ本多中務大輔

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

出獵及び一位し局は本副より婚儀と規式は調しめ事、
于時は獵物は猥物し老氏に揚り老氏の家臣吉田掃部院
は御前に召て其獵物は揚り　此月　大神君と　約命は
本多松平伊豆守信一左衛門江戸に於し城し警衛を子信吉
に代て同國水戸に城内は勤む　信一水戸し城に至事今年七月
下旬より翌年正月に至り
信吉左衛門府中し城内六人に兵庫頭に渡る父に代て
江戸に於は城内は勤む

八月小

廿九日　大神君　母公　御大方　逝去　七十五歳御通院殿光岳
蓉譽和香大禪定尼　此秋七佐
し國に唐和寄来りし此詞進す

十月大

二日　大神君伏見は出て江戸に赴せ事ハ　十八日中納言
秀秋逝去す　二十二歳

十一月

八日松平三郎四郎　于時十一歳後ゆゑ越中守と号　遠州鶴川より江戸に来る
本多佐渡守正信は此　上野達召て西し丸に来る
大神君に謁す寒天し東府は感し御出前る本城より
来れり者誰かなし此は弱し事なに青山七右衛門尉惟て江青山
は召て　約命に曰源氏当定猶か三男遠州より来る
台徳院殿に仕へて欲し是則我寄子なりし此　命すべく
同相吾何源は本副より青山七右衛門尉と共に本城に来る
大久保本様与忠憐奏聞しして三郎四郎始て

台徳院殿ニ謁セ廿六日　大神君江戸ニ城ニ達給ヘ
越セ玉ヘ　此月　武田万千代（大神君ニ法子母ニ氏ニ依テ武田ト号セ）　常州水戸ニ
帰リ（元下総国佐倉ニ在来）

十二月

四日洛陽東山大佛殿失火　廿五日　大神君伏見ニ城ニ
入御　廿八日高津忠恒伏見ニ来テ　大神君ニ謁セ
浮田八郎高津忠恒ノ所門ニ勢居セリ此ニ達セ　此年
下総国小美川ニ城食邑一萬石去井甚三郎利勝ニ帰リ
下総国壬生日根野織部正吉明上総国畔蒜郡ニ内之ニ
里ニ口食邑二萬千石去屋民部少輔大臣ニ帰リ常州
多賀郡食邑四萬石ニ戸浮九郎五郎ニ帰リ下総国ニ

あるを二千石ニ高木善次郎正次同国印井郡五百石青山
大蔵輔幸成ニ帰リ　此年中阿尾隠与秀祐始テ
大神君ニ謁シ此家人ニ属シ吉野郡ニ於食祿ニ帰リ
夏年信昌ノ三男忠政ニ松平ニ姓ニ帰テ松平掃津与
と号セ弟松平下総与忠明小幡ニ帰リ三州江州西国
ニ於来地ニ帰リ三州作手ニ住セ　河部四郎三清尉大政
（始し名四郎五郎）数年大久保忠隣ノ許ニ閑居セ
台徳院殿忠政ノ老養ニ此君及ヒ　大神君ニ請テ
忠政ニ此ニ帰ニ召セ于時忠政七十三歳
慶長八年癸卯正月大
一日諸大名悉枕中ニ大坂ニ越キ秀粒ニ謁シ新正ニ

祝して其笑後早る後大坂は五位を伏見を赴くことを
舊名を晦りて　大神君詣士る　命る明春正旦し慶
笑先秀粉にて来笑し与信　作なり　二日群臣伏見
し城に登る　大神君に新正し笑後献す　十五日松平
石見守に網遠列　久邦とし城は將る座列筑波郡小張村
に於食邑一萬石は賜り門千石は勢列平尾村蔵村に
しる舊は如賜て座列に移　此月甲斐國は
五郎太九郎利（後改良宣）に賜り　池田茂松（于時五歳　大神君しは外孫輝政し二男なり）
に備前國は賜り伏見し城に登る　拝禮す于時信
大神君御獨物（吉光）　台徳院殿より　は猶指は賜り　藤松幼
しかる信を見し新茂利隆茂松に代て是は知り

二月大

六日信州川中島は將る義作國は廣右近大夫忠政に賜川中島
は上総介忠輝に賜り（元下総國根井に居す）　十二日　大神君嶋征夷大將軍
賜牛車　台杖同日為淳和特學事院家尚氏長老任右大臣給
ふ　此日秀康参議に任し　従三位に叙す　池田輝政少將に
任す　此年板倉四郎右衛門尉備前守信五位に叙伊笑守
に任す　廿一日　大神君伏見より　は入洛　廿五日
大神君將軍宣下し　伊笑

行列

一番（は物　は物）　朝夕十人　同朝　善阿彌　猿馬
二番　は出寺行　板倉伊笑守

三番　隠身各鞍馬　四番　新色

右　布多賀四郎　渡辺木蔵　鞍馬善六郎　横田甚五郎門

左　山上蒲四郎　鶴田清右衛門　高木九助　近藤平右衛門

五番　白張七人

六番　諸大夫歩行

右　竹中宗女正　飯尾浮与　三好備中与　三好越後与

左　佐々木民部輔　近藤信濃与　松平主使与　戸田宗女正

右　円藤左京亮　秋元但馬与

左　石川主殿頭　酒井丹後与

松平右衛門佐　松平出雲与

永井右近大夫　三浦監物

七番　御車　布衣　布衣　米津清右衛門　成瀬小吉

中山左助　柴田左近　横田甚右衛門　安藤彦三郎

榊原甚五郎　阿部左馬介　日下部五郎八　長谷川久五郎

伊奈熊蔵　光鶴主猪正　林藤五郎　朝比奈小蒲太郎

加藤善左衛門　鳥井九郎右衛門

石川半十郎　都築與五右衛門

御鞍之役　本多雅屋助康俊

八番　駿馬諸大夫

右　里見讃岐与義高　松平甲斐与忠良　松平飛騨与忠政

左　井伊右近大夫直勝　松平出羽与忠政　松平玄番頭[illegible]

右　本多上野介正純　本多丹後与康重

左石川長門守康通　本多中務大輔忠勝
九州
越前宰相 秀康　若狭宰相 京極高次　豊臣前宰相 細川忠興
安藝少將 福島正則　播磨少將 池田輝政

献物

主上江　銀子千枚　親王江　同百枚　女院江　同二百枚
女御江　同百枚　銀子三十枚　新大きけ　同三十枚
さんはきけ　同五十枚　もちしき　同三十枚　あきけ
同三十枚　大おもれ人　同二十枚　新ないしき
同十枚　いよ　同五枚　はさや
同五枚　はまみ　同十五枚　はまに五人

同十二枚　女嬬四人　同二枚　ひはさ二人
同六枚　はまのし二人　同五枚　うち
同五枚　おちれ人　同五枚　はこやれおしい
同三枚　えもんはさ　同三十枚　はこ川のはまう人

四月大

十六日　大神君京都より伏見れ城に還御　廿二日秀頼
内大臣に任せ 元様大納言

六月小

四日越前國丸岡に城合邑四萬石本多飛騨守成宰に賜り

七月大

三日　大神君伏見より出入洛　十五日

大神君京都より伏見に至御　廿八日
台徳院殿し　姫君（天寿院殿　于時七歳）　豊臣秀頼（于時十一歳）に嫁し玉
ふ此時　大神君ハ伏見し城に住居也
台徳院殿ハ江戸に住居城なり　御臺（宗源院殿）　姫君ハ
住送りとして伏見に赴せ玉ふ　諸具ハ調ひ婚禮ハ
儀ハ俗しまふ（此時宗源院殿ハ伏見ニ延住一廿此姫君後京極元使なたるる嫁也）　姫君ハ加ふ事なる
伏見し城より大坂に到ると玉ふ大久保相模守ハ大博奉興
に従ふ西國大名川辺ハ警衛也　黒田筑前守長政弓
鉄炮ハ各三百挺ハ以ゆゑ堀尾信濃守人夫三百に鉄ハ
持しめ此ハ御祈し通り難き事なる玉ハ鉄ハもつて
開通すと　大神君此事ハ後に付召堀尾ハ不為ハ　秀頼ハ此ハ寄
御感ハ玉ふ黒田ハ事ハ悦ふ給

お儀ハ云　姫君ハ住輿大手し様に至御し様より本城
ハ云関に至て畳ハ敷て白綾ハ以其上ハ二覆と兼て相定
ひしなるに片桐市正云　大神君義麗ハ好ミふ給此義
也ハ急ニ不可應し旧通て制せる依て是事ハ止む
姫君ハ住輿大坂し城に入り大久保相模守忠博
奉興る従ふ浅野紀伊守長ハ此ハ　奉興ハ迎しハ
八月小
十日　水戸中納言頼房誕生（幼名鶴松丸又右衛門者　母頼宣と同し）　十四日
松平周備守康元卒也（五十二歳）嫡子田斐守忠良家繼ハ
継く　十八日浮田八郎ハ九州より召て豆州八丈島に配
流せらり

九月小

十一日　武田信吉逝去　二十二歳

十月大

三日　大神君山岡道阿弥ヶ宅ニ渡御ス道阿彌答禮ハ
秋ニ山岡五年以景以ヶ嫡子新太郎景本　于時八歳ハ道阿彌
嵩子ニシテ今日始テ　大神君ニ謁ス常陸國古渡ニ
寄テ食邑一萬石ハ賜ヶ

慶長九年甲辰正月大

一日江戸ニ城新正ニ笑儀例ニ如ク　十五日新庄猿阿ヶ
亟ニ祝宮門ヶ法印ニ居ス　大神君及　台徳院殿ニ謁ス洗別関
ヶ原一戦ニ時亟ニ祝石田三成ニ属ス伊笑國上野ニ城ニ

擁護ヶ事ニ能ニ依テ蒲生左三郎秀行ニ頼ラル其列令ハ
ニ閉居ス元来亟ニ祝　大神君ニ忠志ヲ以テ雖上方一偏ニ
石田ヶ下知ニ従ヒ万亟ニ祝一人ニ当ル首ニ志ハ立テ難キ
ニ依テ本意ニ非ニ雖三成ニ属ス一旦上那ニ城ニ擁護
ヶ此方ニ参ス　台徳院殿ニ達ス万其能ハ新ニ見ヘシ
見テ此家人ニ属ス

二月大

四日　台徳院殿汐令ニ依テ東海道及越後海道ニ各一里塚ハ築ル其小ハ此家人ニ当ル温ス同年五月
下旬ニ至テ成就ス

三月小

一日　大神君江戸ハ城ニ達ス遊ス趣セ玉ハ此時豆州熱海
ニ湯ニ一七日ニ入湯ス　廿四日墨田ヨリ水卒去ス　辛九歳俗名宮三郎孝高
廿七日　大神君伏見ニ城ニ老御　廿九日
大神君池田輝政ノ宅渡御ス輝政答照ニ献ス于時
輝政ニ祿数多く賜ル室嫁　大神君ニ姫　黄金二千両ニ賜ル

四月小

廿日　参議秀康江戸ニ来リ玉ハ　台徳院殿江城ニ於テ
是ニ答シ玉ハ　廿一日　大神君池田紀伊ノ寺長ノ宅ニ
渡御ス　此月松平五左衛門尉一生卒去ス　三十五歳

六月大

十日　台徳院殿ニ入浴　廿二日　台徳院殿参内此日松平
又四郎忠利従五位下主殿頭ニ任ス　水野三左衛門尉分長
従五位下ニ叙シ　備後ノ守ニ任ス

七月小

十七日武州江戸ニ城ニ於テ　大猷院殿ニ誕生　母云浅井
備前ノ長政ノ娘河井雅楽頭忠世ニ抱匿刀ニ付ル初ヒ皆
大神君　宰相秀康ニ家ニ渡御ス相模ニ見ル玉ハ
十八日菅沼織部正定盈卒去ス　辛三歳

壬八月小

十四日　大神君伏見ニ出ス江戸ニ趣セ玉ハ

十二月大

山岡道阿弥卒去ス　辛三歳俗名備前ノ　菅子新太郎景本ニ於テ

依て宗茂か実父主計頭景以　約令以奉して景茂に
代て追伺の陳ら遣り五千石給て與力同心まて支配せて
此月松平伯耆守忠一〈本姓中村初名一学〉か家臣横田内膳正を誅せて
其磊老須ゝ子忠一か寡主輔て国政を執せて依て横田によて
忠一に疎ひ忠一とても此しを家人安井清一郎近藤五右衛門尉
天野宗杢等道家長右衛門尉〈盾道家ハ外舅なる故なり〉〈大神君よりも忠一か室家又松平周防守康元〉
〈か娘は　大神君は姪女として忠一に嫁し玉ふ〉
善右衛門尉猶忠一に讒して其子とも與せて忠一横田を城
に招て飯日宴し其處にて家人ひ忠一横田に切り横田鹿
に神刀もて次ふし盾在處に適て逃れ出る忠一及三臣共に横田
か力に及ひし盾を侵せり童子主の力をそれちて忠一に
切り天野宗杢の次以後に宗又学の依て宗杢主として
に鹿に共に安井道家来役童子に頼り近藤五右衛門尉を
呼出ニ安井もして雖忠一ふ年にして武功し横田か誅せんこと
に危く思ひて近藤長刀に推の其中まて入て満て塞ぎあり
に礼宗不と忠て横田鹿に神もて随逃れ出る近藤とも依て
通て横田に報て内膳正嫡子横田主馬助これに從ひて坐ゝ
居城飯山の城に拘で篭に拠る忠一か家人柳生五郎右衛門尉
に神将軍に主馬父子の立しを飯山の城を攻かる忠一ゑに
命せて飯山の城を囲ひ雲州ハ隣國なる依て堀尾帯刀吉晴
同依かる忠氏父子揆立として伯州に命ずる忠一か軍将に
来会ある共に飯山の城を囲ひ攻討城をいて能拒き戦ふ其

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

寄手は軍勢命に随ひ命を被りて老身 柳生五郎右衛門
合戦達者なるに依て其術に長せしと雖忠一の家人若井
此三左衛門を柳生に討捕り寄手は猛勢競ひ押し寄
城兵防ぎ遂に利を失て城は火に放ちて横田主馬父及城兵
悉自殺して依て此近国縣方騒動せし此田は
大神君と上下に達せし者は此出弥安井清三郎は近藩
善右衛門尉天野宗兵衛道家長右衛門尉等四人は江戸住
には縦明なし後各殺害せられ近藩善右衛門尉は初より
忠一に従ひ修め此企てに與せして横田は彼の殺さし雖其罪
は宥らる後年忠一江戸に来り侍横田は誅せらる
に依て江戸に入事は不得品川驛に蟄居せし日は卒して後

赦免されて後忠一遂に江戸に至る 大神君に謁して
青山藤七宗勝奉成後去事は此時御前に閑居せしと雖
此年十二月は赦免されて江戸に召されて後此年山内對馬守
一豊従四位下に叙して于時 大神君より江戸に入 慶長元一月
に摂り松平伊豆守従一位従四位下に叙し其子信吉従五
位下に叙し 安房守に任して山口駿河守直友従五位下に
叙し駿河守に任して安藤五左衛門尉重信従五位下に
叙し但馬守に任して 此年松平三郎四郎定綱後越中守
下総国山川の所に於て采地五千石を賜る且国朝井に城を
将る上総国に於て城合邑五萬石酒井宮内大輔家次
に賜る常州貝原村に於て采地千石永井伝八郎尚政後

王侯宮等ニ賜リ　此事朝鮮人来聘　使相雲孫又或金見舜

慶長十年乙巳正月大

一日江城ハ茅葉ヲ以ヲ例ハ如し　諸士来賀也　三日

徐ニ

一喧嘩口論堅停止し上依視ハ知音好覚し軍

旅ニ至ル者ハ本人より猶以ヲ為曲事

一ハ上洛中人通ニ義ニ停止諸雖然中分旅ニ至ル者

下向し上ニ相改事

一政次中し義ハ書付し渡ニ至ル相故事

一諸事其本行不ニ相首下知事

一政次中前し義本行人ニ任指掌事

一不ニ至押買粮籍事

一舟渡し義先次第ニ為一手越史馬ニ下ニ為同事

附他ニ手ニ軍ニ乗合ハ義一切停止し事

右し條ニ至旅違背者速ニ可ニ蒙科者也

慶長十年正月三日

九日　大神君江戸ハ城ハ至ニ遠路ニ赴ク事ハ麻病

ニ依テ殿府城ニ御滞座

二月小

五日　大神君殿府し城出御　十九日　大神君伏見

し城ニ忌御　廿四日　台徳院殿江戸城ハ至ニ遠路ニ

赴ク事ハ供奉し軍十萬余人此日神奈川ニ忌御

廿五日茶湯ニ着御　廿六日小田原ニ着御　廿七日三島ニ
着御連日御湯ニ三日此ニ御滞座

三月大

二日　台徳院殿蒲原ニ着御　三日駿府ニ着御
四日藤枝ニ着御　五日掛川ニ着御　六日濱松ニ着
御此ニ一日御滞座　八日吉田ニ着御　九日岡山ニ着
着御　十日清洲ニ着御　忠吉ニ家ニ入御樂事
十三日大垣ニ着御　十四日佐和山ニ御ニ依テ此ニ三日御
滞座　十六日永原ニ着御　十七日猪所ニ着御　三日
此ニ御滞座供奉ニ軍事ニ待ス　廿一日彩雲ニ憩ム
台徳院殿伏見ニ城ニ入ス　廿九日　台徳院殿ニ入門

四月大

七日　将軍與奪　八日　大神君伏見ニ入給　十日
大神君参門　十二日秀頼右大臣ニ任ス元内大臣　十五日
大神君伏見ニ還御　十六日　台徳院殿征夷大将軍
氏長者淳和奨学両院ニ家ニ尚ニ給ス　同日任
内大臣　叙正二位職牛車随身兵杖　同日　三河ニ秀康
権中納言ニ任ス下卿ニ忠吉左近衛左中将ニ任ス三位ニ
叙ス元内大臣ニ任ス四位下　上総介忠輝左近衛権少将ニ任ス四位下
ニ叙ス元内大臣ニ任ス五位下　池田新茂利隆侍従ニ任ス柳原小十郎
康勝従五位下ニ叙ス　遠江ニ任ス松平三郎四郎三之勝
従五位下ニ叙ス　越中ニ任ス大久保右京元教隆従五

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

位下叙し同主猶正孝信従五位下ニ叙す二馬力左近吏
忠房従五位下ニ叙す青山雅楽助孝成従五位下ニ叙
永井侍八郎尚政従五位下ニ叙し信濃守ニ任ス本貴節
正次従五位下ニ叙し主水正ニ任す秋田東太郎実季
従五位下ニ叙し城介ニ任す松平香四郎正朝従五位
下ニ叙し老彼守ニ任す板倉周防守重宗従五位下
ニ叙す板倉内猶正重昌従五位下ニ叙す廿六日
台徳院殿将軍宣下し泮奨ニ至て車ニ登る万朝ニ入
玉ふ

行列

一番

一人一人一人 一人一人一人

一人一人一人 一人一人一人

二番

御物 荷 同 長持 一人

御物 荷 同 長持 一人

公人朝夕長刀権何弥傘持

侍人 侍人 侍人 侍人 侍人

右長刀 小老同同侍 青山常陸介忠成

小老同同侍

傘持 ナ徳白布帯 刀サヽス

侍同同 侍同同 侍同同 侍同同

三番御先行

左長刀 小老同同侍 板倉伊賀守勝重

小老同同侍

傘持

侍同同 侍同同 侍同同 侍同同

右　小者同口付　小者同口付　小者同口付　小者同口付　小者同口付

右

四番随身所　多田兵四郎　年穂江左衛門

左　小者同口付　小者同口付　小者同口付　小者同口付　小者同口付

左

青山善四郎　成瀬清吉　岩瀬吉三郎

内藤右衛門　神原年之介

大久保典次郎　袁川金左衛門

高木九三郎　神戸石見守

五番白張十二人

六番歩行諸大夫

右　渡邊宗女正

左　松平長門守

神原遠江守　阿部備中守

松平越中守　青山伯耆守

青山雅楽助　小出信濃守

大久保右京大夫　高力左近大夫

大久保主膳正　加藤左馬介

内藤帯刀　丞馬玄蕃頭

山崎左馬允　古田兵部少輔

仙石越前守

佐野修理大夫

真田伊豆守

石川玄蕃允

池田備中守

九鬼長門守

戸田肥後守

佐藤駿河守
山城宮門少輔
佐々法政守
竹中伊豆守
毛利伊勢守
佐久方河内守
冨田信濃守
徳永左馬介
古方丹後守
本多太守助
水野市正

中川修理大夫
佐々信濃守
稲葉藤人
池田備中守
三好丹後守
渡辺筑後守
水野河内守
能勢伊豫守
生駒左近大夫
田中隼人正
稲坂主水正

澁川豊前守
金森出雲守
津田長門守
三好因幡守
寺澤志摩守
有馬佐渡守
稲坂法政守
本多右衛介
東山伊賀守
内藤兵庫守
古屋民部少輔

新庄越前守
鍋島和泉守
永井信濃守
溝口伊豆守
堀伊賀守
堀法政守
水野隼人正
牧野豊前守

古田左近大夫
諸訪因幡守
高木主水正
鳥居古佐守
日下部伊豫守
飛川内藤正
板倉周防守
西尾隠岐守

小栗左衛門大夫
柴田筑後守
津田丹後守
羽柴壱岐守
松平右兵衛
古方河内守
古井大炊助
渡辺山城守

井伊掃部頭
大久保加賀守
布衣
安藤治右衛門 同
松平勘介 同
根部仲

御長刀

布衣 小深淵三清　同 安藤與十郎　同 根岸與十郎

布衣 久永源三清　同 本多万介　同 渡辺半四郎

布衣 倉橋門匠　同 松平助十郎　同 小栗庄次郎

村越門猪正　久貝忠三郎　今村彦三清 [illegible]

神尾五三清　小栗甚六郎　中根喜八郎 同同

御傘持

影山左助　長谷川謙岐 [illegible]

内藤勘五郎　山岡五郎他 [illegible]

禹田庄五郎　山口小平次　三宅半七郎 [illegible]

河村乾八郎　英津久七郎　天野左三清 [illegible]

御劍役　酒井宮内大浦家次

十徳白布帯 傘持 小者

十徳白布帯 小者

十徳白布帯 小者

七番

騎馬諸大夫衆

長刀

小者同同侍同同口付

小者同同侍同同口付

あさしきこもんれ上下 [illegible]

小笠原信濃守忠備

同 右同所　松平安房守信吉　同 大同所

同 右同所　松平丹波守康長　同 大同所

同 右同所　松平甲斐守忠良　同 大同所

同 右同所　小笠原左衛門大夫信之　同 大同所

同 右同所　松平周防守康重　同 大同所

同 右同所　本多出雲守忠朝　同 大同所

同 右同所　本多住勢守康紀　同 大同所

十徳白布帯 傘持 侍同同

十徳白布帯 侍同同

侍同同

侍同同

同　大口町　牧野[illegible]河内忠成　大口町　同　大口町
同　大口町　皆川志戸内淳庸　大口町　同　大口町
同　大口町　内藤左馬介政長　大口町　同　大口町
同　大口町　多居左京元忠政　大口町　同　大口町
同　大口町　大久保相模内忠隣　大口町　同　大口町
同　大口町　平岩主斗既親吉　大口町　同　大口町
同　大口町　神原式部大輔康政　大口町　同　大口町
同　大口町　酒井大三郎大夫忠世　大口町　同　大口町

八番　塗輿之所

朱浮中納言　上杉景勝　毛利宰相　甲斐守秀元　[illegible]宰相　[illegible]
大崎少将　松平陸奥守　正宗　薩摩少将　松平大隅守　[illegible]家久　安藝少将　[illegible]正則

河中島少将　松平上総介忠輝　秋田侍従　[illegible]大夫　[illegible]宣　最上侍従　出羽守　[illegible]光
越後侍従　堀久太郎　秀治　今津侍従　松平[illegible]守　秀行　加賀侍従　[illegible]守　利常

歩行　諸大夫鳥帽子　[illegible]　[illegible]　[illegible]持　傘持

五月

一日将軍宣下し　賀後として　諸大名各群来る
台徳院殿に謁し　[illegible]　十一日
台徳院殿は名代として　忠輝　于時十四歳　大坂に赴く　此日伏見
に謁す　十三日山門出佐守　一[illegible]　[illegible]子　[illegible]　伏見
し城に[illegible]　大神君及　台徳院殿に始て謁す
詢命する位を任[illegible]馬守に　松平[illegible]守　定勝の母
大神君御[illegible]女として　[illegible]馬守に嫁せしめ玉ふ　于時

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

大神君より江獨物（鯖布包平）江獨物（来書光）　台徳院殿より
江獨物（新芳五国光）對馬ゟ之場り又　大神君より江獨物（刈光）
江ゟ佐ゟ之場り　十六日　台徳院殿伏見ゟ城江出御
江戸ニ赴ク出ル

六月大

四日　台徳院殿江戸ゟ城ニ還御

七月小

五日伏見ゟ城江御しめ出ん為　大神君西ゟ為
渡御

九月小

十五日　大神君伏見江出給て永原ニ見御　十六佐和山ニ
見御ニ為ニ依て此ニ二日御滞在　十九日赤坂ニ見御
廿日岐阜ニ見御此日山門ゟ佐ゟ一番ニ卒ニ守城　廿日
稲葉山ニ狩し出ル　廿二日清洲ニ見御此ニ二日御
滞在　廿四日　忠吉ゟ家渡御ゟ有り本横ゟ見ル出ル
廿五日岡崎ニ見御此ニ四日御滞在

十月小

一日　大神君中泉ニ見御此所ニ狩し出ル　十七日田中ニ
見御此ニ四日御滞在　廿二日駿府ニ見御　廿三日
三島ニ見御　廿五日小田原ニ見御　廿六日茂澤ニ見御
廿七日神奈川ニ見御　廿八日　大神君江戸ゟ城ニ
已入ル

国立国会図書館　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87
ガラス使用

十一月大
十七日 大神君忍川越ニ狩シ玉フ
十二月大
十五日南海道伊豆八丈島ニ大山一夜ニ涌出ス 廿六日
大神君江戸ニ還御 此年 大神君ノ鈞命ヲ以テ
浅野弾正少弼長政ノ女ヲ以テ松平越中守定綱ニ嫁セシム
大神君ノ 台命ニ依テ酒井讃岐守忠勝ノ姫ヲ以テ松平
隠岐守ノ嫡子河内守定行ニ嫁ス 大神君命シテ
元白翁酒井ハ重忠ガ嫡ヲ以テ首実ヲ以テ嫁娶ノ事ヲ仰セ以編
シ 水野河内守信忠ノ嫡女十四歳ヲ 作事婚礼ノ沙汰
以執セシメ玉フ 又村越茂助日下部定吉ノ周旋ス
命ニ依テ婚礼ノ資用ヲ以テ賜ハシメ玉フ 榊原式部大輔康勝ノ
女ヲ以テ 大神君ノ養女トシテ池田輝政嫡子左衛門督利隆（輝政ハ武蔵守輝政ノ室家ハ利隆ノ母ハ中川瀬兵衛清秀ノ女 大神君ノ養女トシテ利隆）ニ嫁セシメ玉フ
青山播磨守忠成ノ女ヲ以テ 土井大炊頭利勝ニ賜ヒ嫡
以テ 安房守対馬守ニ任ジ 将軍ノ命ニ依テ丹波ノ地ヲ賜ヒ
ニ嫁ス 小具足婚礼最義ナリ 浅野弾正少弼長政是ヲ周旋
甲斐守長政 答礼ニ非ス 加藤肥後守清正 浅野
紀伊守幸長 蜂須賀阿波守至鎮 加藤左馬介嘉明
亦詫言ヲ以テ 大神君ヨリ御挨拶有之 左馬介
御馬ヲ進ム 利隆ニ 此年江州栗田郡 日野郡 野
洲郡ノ内ニ於テ合邑五千石ヲ京ノ料トシテ酒井

838
12
87

雅楽頭忠世に賜り　台徳院殿に命ぜ来て山口伯馬
を主政大蔵殿とす　一柳監物恵賞の次第恵敬
子号作　雅楽府に来候ろ始て　大神君に謁し又江戸に
至て　台徳院殿に謁して恵敬此事より質をしてく
江戸に在り毎日八十餘人猿貸ぬ物ろ

家忠日記追加巻之十八終

国立国会図書館　　タイトル『家忠日記増補追加 25巻』　請求記号 838-87

ガラス使用